カウント・ダウン

灰谷爽冶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カウント・ダウン

【Ｎコード】
Ｎ５２９６Ｈ

【作者名】
灰谷爽冶

【あらすじ】
謎の病「不在石化病」に罹った、余命僅かの女性と看護士の物語。
※恋愛色薄め、結末も微妙です。ハッピーエンドがお好きな方はご注意ください。※

（前書き）

作中の病気や設定などは、全て作者によるフィクションです。

「小野さん、今日は調子よさそうですね」
「あ、わかります？
なんだかね、少し身体がラクなんです」

僕はカーテンを開けながら、ベッドで半身を起している小野さんに声をかけた。
梅雨の合間の太陽はぎらついていたけれど、よく吹いている風は涼しい。

「眩しいですか？　半分閉めておきます？」
「大丈夫、全部開けてしまってください
あー……気持ちいい」

個室の中のよどんだ空気は、少し湿り気を含んだものに変わっていく。
中庭の植え込みの匂いが混じった外気は新鮮で、小野さんはそれを、目を閉じて目一杯吸い込んだ。
たったそれだけのことに、この世の誰よりも幸せそうな顔をして。

第十二聖路加病院、７０８号室。

この病院の、最奥の個室。
目の前にいる女性、小野静枝（おのしずえ）さんの選んだ、最期の場所。
今この場所を形容するなら、多分そんなとこだろう。

僕たちの住む世界で最も深刻な病、『不在石化病』。
恙無く人生を過ごしている若者が、ある日突然、自分の寿命はあと一年だと言い出す。
周りの人間は相手にもしないが、まもなく彼は吐血。
そして空気に触れた途端、吐かれた血液は砂になる。
調べると、身体の中が少しずつ石になり、砂になっている。
原因は不明。
治療方法も見つかっていない。
ただ、罹った人がみな、絶望とは違う意味で、生きることには意味が無いと思っていた、という共通点だけはわかっていた。

生きることへの意味の不在に気付いた人間が罹る、肉体が石化していく病。

『不在石化病』という名前には、そんな意味が込められている。

小野さんの寿命は、あと３０日。
石化は少しずつ、でも毎日確実に進んでいった。
彼女は身辺を整理して、一人でこの病院に入っている。

見舞いには、誰も来ない。

「…今日も、あまりお食事できませんでしたね」

「うーん……何を食べても、なんだか味がしなくて」

日に日に落ちていく食欲に、僕の眉がひそめられる。
小野さんは今週に入って、ほとんど食べ物を食べていない。
水分を摂るのも、ほんの少し。

「でも大丈夫ですよ、気分はね、最近とてもいいんです
…不思議ですね
身体の中は、もうほとんど石と砂しかないのに」

絶望だとか、諦めだとか、暗く沈んだ負の感情を全然見せない瞳で、
彼女はふんわりと微笑む。
こんな風に、その澄んだ目に見つめられるのはとても辛くて。

「…じゃ、少し散歩に出ましょうか
車椅子、持ってきますね」

僕は慌てて、けれど少しもそう思わせないように、一度個室を出た。

小野さんは、僕にとって最初の「助からない患者さん」だ。
今年看護士になったばかりの僕と、彼女はたった二歳しか違わない。
想像しろといわれても、出来ないことだ。
二年後、彼女と同じ年で、自分の命が尽きたら、なんて。

少なくとも、彼女のように穏やかになんて、きっといられないと思う。
でもだからこそ、僕はこの病気には罹らないのだろうけれど。

不在石化病に罹ってしまった人たちは、みんな似ている。

性格は穏やかでおとなしく、従順。
繊細で、人間関係が苦手。
二十代後半から、三十代前半。
未婚で恋人もなく、どこか無為に人生を消化しているような感がある。
生きることに希望を見出せないけれど、かと言って積極的に死のうともしない。
義務のように、変化のない毎日を繰り返している。

小野さんも、やっぱりそんな人だ。

病気の根本的な治療方法は、まだ見つかっていない。
珍しいことに一切の苦痛の無い、この病気の患者さんたちは、最期はみんなほんのりと微笑んで死ぬ。
理由はわからない。
朦朧とした意識の中で、何か幸せな夢を見ながら逝くのだろうとの推測から、自殺願望のある人たちの間では「幸福病」なんて呼ばれているらしい。

「…それで、本番で思いっきり間違えちゃって」

「ははは、せっかくの初舞台だったのに、それは残念でしたね」

「ふふ、足が震えるほど緊張したのなんて、初めてでした」

小野さんは少女時代の失敗談—これは、初めてのピアノの発表会の話—を話しては、どこか恥ずかしそうにはにかむ。
２５歳とは思えない、あどけない女の子のような笑み。
澄んだ水みたいな印象の小野さんが、ちょっと幼く見える瞬間。

「そういえば、同じ教室に好きな子がいたんです
なのに失敗しちゃって、しばらく泣いたなぁ」

「あ～…ほろ苦いですね、好きな子の前で失敗って」

「ふふ…　ね、そういう芦品さんの初恋っていつでした？」

「…え、僕ですか？」

「はい、いくつぐらい？　中学とか、高校？」

芦品海（あしなかい）。
僕の名前。
透明な小野さんの声はいつも、ひどく綺麗な音で僕の名前を呼ぶ。

「……17、だったかな」

「本当？　ちょっと遅くないですか？」

「うん…でもそれくらいですね」

「へぇ…相手はどんな人？」

「よくあるパターンですけど、教育実習の先生
部活のOGで、毎日部室に来てくれてて」

こんな風に毎日する僕の話がとても楽しみなのだと、小野さんに言われた。
お見舞いには誰も来ないし、食いしんぼだったのに、最近は何を食べても美味しくない。

規則正しく睡眠を取っているから眠くもならないし、本やテレビには興味がないから、と。

これも、不在石化病の症状だ。
およそ外の世界に通じるものへの興味を失い、感覚が麻痺していく。
病人にありがちな、自分の殻に閉じこもるだとか、うつ状態になる、みたいなものはない。
一般的に、罹患前に比べて精神状態は安定し、今までよりほんの少し、他人と関わることに興味を持つ。

この点に注目して病院側が試している延命措置こそが、僕がするよう指示されている「コミュニケーション療法」だ。
患者の望む関係を作ることで、精神面から患者の寿命に働きかけられないか。
どんなに探しても治療方法の見つからないこの病気について、延命措置はこんな稚拙で、的外れに思えるようなものしかない。
それでも、何日か寿命をのばすことができたという報告はあって。

小野さんと親しくなったのは、食事の介助をしたのがきっかけ。
不在石化病は病気が進行すると、身体の末端が動かせなくなる。
両腕が使えなくなった彼女の食事を手伝ったとき、「にんじんは嫌い」という話題が何だか盛り上がって、それからだんだん打ち解けて。

僕が彼女の最期の担当に選ばれたのは、たったそれだけの理由だっ

た。

「不思議なんです
もうすぐ自分が死んじゃうなんて、全然実感がないの」

読んでいた本から顔を上げた小野さんが、あるときぽつりと僕に言った。
あんまりあっけらかんと言うもんだから、隣に居た僕の方がぎょっとした。

「今までね、生きている実感なんて、あんまりなかったから
ただ毎日が、線路みたいに延々と続いていて、そこを走るしかないって、そう思ってたんです
だからそれが終わるんだよって言われても、なんだか」

「…そんなこと言わないでくださいよ
大事なのは希望を持つ事だって、言ったじゃないですか」

透明な瞳は、なんだか全てに達観してしまったように見えた。
小野さんの澄み切った表情に、僕は焦ってしまった。

「……生きてるのって、そんなに大事ですか？」

「当たり前じゃないですか
何はともあれ、まずは命あってのものでしょう？
じゃないと好きなものも食べられないし、好きな音楽も聴けないでしょ？」

「そういうことじゃ、なくて」

「そういうことからでいいんですよ
毎日のちょっとした、好きなことに執着する
ちっぽけかもしれないけど、それが生きたい理由だっていいじゃないですか」

「…生きたい、理由」

なんでだろう、あの時ぼくは必死だった。
与えられた職務以上に、小野さんの気持ちを変えさせようと、必死になっていた。

—生きているのが、そんなに大事か

そんな風に思いながら、自分が死ぬのを待っている小野さんを、見たくなかった。

「……すいません、なんか、説教くさくて」

「……」

「僕、もう行きますね
何かあったら呼んでください」

「芦品さん……怒ったんですか？」

「……」

「ごめんなさい、そんなつもりじゃなかったんです
ただ……」

怒っているとしたら、それは自分自身にだった。
小野さんの気持ちを変えられない自分が、ひどく苛立たしかった。
きっとそれは、そのまま表情にも出ていたのだろう。
いつも喜怒哀楽の「楽」ばかりしか映さなかった、小野さんの瞳が揺らいで。

「無為に生き続けることが第一だって、どうしても思えないんです
命があることが何より尊いなんて、どうしても思えない
今まで生きてるの、とても辛かった
生きたい理由なんてなくて、私にはなんにもなくて」

「小野さん」

「…生まれたくなんてなかったって、毎日思っていたこともありました
親を恨んだこともあった

今まで生きていて、私は何にも手に入れられなかった
あったのかもしれないけど、私にはそれを受け取る器がなかった
なにもなくて、私にはなんにもなくて」

「小野さん」

思わず、体の脇に投げ出されたままの、小野さんの手を握った。
もう動かすことのできない小野さんの手は、それでもちゃんと暖かくて。

されるがままに右手をとられながら、小野さんは続ける。

「およそ人間らしいことなんて、何にも知らないままなんです
もちろん、女らしいことも
好きになった人は何人かいましたけど…だれともご縁がなくて」

「……」

「あ……っやだやだこんな、メロドラマみたいな
恥ずかしいなぁもう」

「……見つけられますよ」

「……」

「見つけられます、生きたい理由も、いい人も」

「芦品、さん」

「寂しいこと、言わないでください
最後の最後まで、希望を持ちましょう」

残酷な嘘だと分かっていても、僕は彼女を虚ろな言葉で励ますしかなかった。
僕には他に、かけるべき言葉がなかった。

それがとても、かなしかった。

数日して、小野さんから担当を替えて欲しいと依頼があったと聞いた。
小野さんが初めて見せた、拒絶だった。

僕はそれでも、彼女の病室に通い続けた。
気まずそうな顔をする小野さんに笑って、知らないふりをした。
話を聞いてから三日目の日に、お土産に、僕の好きな昔の映画のＤＶＤを持って行った。
２０年位前の、ＳＦ超大作。
懐かしいでしょ、って言いながら一緒に見たら、エンドロールのＢＧＭで誤魔化して、小野さんが「ごめんなさい」と呟いた。
動かない小野さんの手を、ただそっと握った。

少しずつ、小野さんの眠っている時間は長くなった。
睡眠中の体温はとても低く、この人は本当に石になりつつあるのだということを思い知らされる。

僕は都合のつく限りは、小野さんのそばに居た。
それが今の僕の仕事だったし、なにより僕がそうしたかった。
小野さんが目を覚ますまで、冷たい手を握っていた。

睡眠時間が長くなるにつれ、心拍も呼吸もゆっくりになっていく。
本当にゆっくりしたリズムの寝息を聞きながら、小野さんが目を開く瞬間を、ずっと待っていた。

最初は、僕に見つめられながら目覚めるということに驚いていた小野さんも、じきにそれに慣れてくれた。
眠りから戻ってきて一番に、視界に僕を見つけて、笑ってくれるようになった。

その日はとても暑くて、小野さんから清拭を頼まれた。
お風呂は二日に一度しか入れなくて、今日は入浴できないから、と。
誰か女性のスタッフに、と席を立とうとする僕を、小野さんはじっと見ていた。

背中だけでいいので、と、少しかさついた唇が動くのを、僕も黙って見つめていた。

うっすらと背骨の浮き出た、華奢な背中だった。
せみの鳴き声の聞こえるこんな中では、少し怖いくらいに白い肌だった。
ぬるま湯で湿らせたタオルを滑らせると、小野さんは気持ち良さそうにため息をついた。
ゆっくり背中を清められながら、小野さんは僕に話しかけてきた。

「ねえ芦品さん」

「はい？」

「前に、『生きてることがそんなに大事か』って、私が聞いたの覚えてますか」

「……ああ」

「あれね、多分今も誤解されてると思うんです
私が……人生に諦めてる、みたいに」

「……」

「私が一番幸福だと思うのはね、生きてることじゃないんです
だからって死にたいとか、そういうんじゃないですよ

そうじゃなくて……」

「僕には……やっぱり生きてることが一番大事な気がします
色んな患者さんや、そのご家族と出会って、みなさん仰いました
『命さえあればいい』、って」

「でも……私は、芦品さんが今までであったどなたとも違うもの
ヘンなのかもしれないけど、命があるのが一番だなんて、自分がこ
んなになっても思えない
……悲しんでくれるようなひとも、いませんし」

「……」

「父親はね、気がついたらもういなかったんです
死んだかもしれないけど、お墓参りにも行ったことないから、もし
かしたら女の人と出て行ったのかも
写真もないから、よく顔も覚えてなかったんです
母は、私のことが嫌いでね
よく言われました、『産むつもりなんてなかった』って」

何故か、小野さんはそこで、とても可笑しそうに息を吐いた。
息だけで、自分を嘲るように笑ってる、そんな風に、背中を揺らし
て。

「15の夜に家出しようとして、母の留守に家にある金目のもの探
したんです
そしたらね、母のたんすの一番奥に、写真があったの
知らない男の人と、母と、私

三人が、手を繋いで笑ってる写真
そこに映ってるのが父だって、すぐわかりました
だって私とそっくりだったんだもの」

首筋に当てられたタオルの動きにあわせて、小野さんは首をすこし傾ける。

「ああ、母は辛かったんだなって、それで思ったの
死んだのか何か知らないけど、とにかく夫はいなくなって、娘はその夫に、年々似てきて
でも母の辛さがわかっても、自分を傷つけたことを、許せなかった
お前なんて産まなきゃ良かったって言われるたび、私だって、生んでくれって頼んだ覚えなんかない、って思ってました
……一度も、そう言い返すことができなかったけど」

「……優しいんですね、小野さん」

「…私が？」

「そう言ったら、お母様を傷つけるって、わかっていたんでしょ？」

「さあ……ただ勇気が無かっただけかも」

うなじを拭くのに、少し髪を持ち上げる。
髪の生え際の間に、小さな蝶の形のあざが見えた。
珍しいと思いながらいたら、それはあざなんかじゃなく、刺青だってことがわかった。

思わず、手が止まる。

「あ…見つかっちゃった
それね、飼い主だった男にやられたの
酷いやつでしょう」

「か、飼い主って」

「母親には世間体があるからって、高校までは無理に通わされたんです
卒業してすぐに実家を飛び出して、そいつに拾われたの
散々おもちゃにされたけど、食べるのと寝るのには困らなかったから
飽きたって放り出されるとき、かなりまとまったお金くれて
アルバイトや水商売しながら、そのお金で株とかやって、しばらく
食いつないでね
知り合いのコネで、小さい会社の事務員さんとして雇ってもらったのが、3年前、かな」

いい調子だと思ったのになー、とぼやく、小野さん。

「いろんな人に出会ってね、私みたいな目に遭ったひと、いっぱいいるって知ったんです
それまでは、何で自分ばっかりこんなに辛い思いするんだろうって、いつも何かを恨んでた
でもみんながそうなら、生きるってそんなもんかもしれないって、ちょっと諦めがついたの

だから、取り立てていいことなくても、もういいや、って」

「…本当に？」

「え？」

「何か、望んだことはあったでしょう？」

少し俯いた、斜め後ろから見る小野さんの顎のラインが、とても綺麗だった。
僕の質問に、小野さんは答えることはなく。

「……芦品さん、幸せって、何だと思います？
長く生きられること？
健康でいられること？
誰かを好きになって、好かれて、家族を持つこと？」

「それは…人それぞれでしょう
でもどの幸せも、生きてないと手に入らないと思いますよ」

「なんか優等生な回答ですね
でも、芦品さんらしいかな」

「小野さんは、どう考えてらっしゃるんですか？」

「少なくとも、生きてることを幸せだって思えるほどおめでたくないなあ
生きるって、地獄を這いずり回るのと一緒だもの」

「……良い事は、ひとつもなかった？」

「さあ…あったかもしれないけど、とりこぼしちゃったみたい思い出には、辛かったことばっかりしか残ってなくて」

背筋を腰まで拭き下ろす。
タオルを、洗面器の中に戻す。
小さい背中に寝巻きを羽織らせ、紐を軽く括る。
ベッドに横向きに座った、小野さんの姿勢を変えさせる。
元の通り、仰向けに横たわるように。

「ありがとうございました
気持ちよかった、すっきりしました」

―じゃば……っ

「……芦品さん？」

僕はもう一度、小野さんの寝巻きの紐を解く。
今度は正面から、寝巻きを開いて。

「や…っ」

「汗、気持ち悪いでしょう？」

瞳を揺らす小野さんを安心させるように、僕は笑う。

右腕を取って持ち上げ、脇の下から二の腕、肘の裏までタオルで拭う。

手のひら、手の甲、指のまた。

終わったら、反対の腕も。

「芦品、さ……」

顎の下、首筋、鎖骨のくぼみ。

まるい胸に、その下。

脇腹、みぞおち、下腹部。

脚も腕と同じように持ち上げて、太腿から、足の指の股まで。

汗のたまりやすい膝の裏側をしっかり拭きながら小野さんのほうを見たら、僕の動きを追いながら、泣いていた。

それでも僕は、全身の全てを拭くまで清拭をやめず、ただ小野さんに向かって、口元だけで笑った。

多分僕が小野さんに向けたものは、強者が弱者に向ける同情と同じ

もので。
小野さんがずっと望んだ後で諦めたものは、ささやかでも本当の愛情で。
ぼくのそれは、お互いが都合よく誤解するにはちょうどよかった。

「叶いますよきっと、小野さんの望み」

最後に涙のあとを拭って、新しい寝巻きを着せると小野さんは恥ずかしそうに視線を泳がせていた。
自分から頼んだくせに、頼んだときには背中だけなんてつもりなかったくせに。
なのにこんな風に顔を赤くしているのが、何だかいつもより幼く見えて、微笑ましかった。

「……ないよ、きっと」

「そんなことありませんって」

「ないって　可能性、すっごく低いもの」

「低いって、どれくらい？」

ぱち、ぱた、と、小野さんは二度ほど瞬きをして。

「芦品さんが……今すぐ私にキスしたいとか思うくらい」

「……」

「ほらね、ないでしょ？」

からかうような声。
全部諦めたような、笑い。
僕はそれ以上の、小野さんのどんな表情も読み取らないようにしながら、一人ではもう動けない彼女に覆いかぶさった。

唇を話した後で見た小野さんの涙が、カーテンの隙間から入る光にきらめいていた。

三日後、小野さんは目を覚まさなくなった。

僕宛にビデオレターがあると婦長に言われたのは、小野さんが目覚めなくなったその日の夜。
自分が目を覚まさなくなったら僕に渡して欲しいと、頼まれていたそうだ。

石化の進行具合からして、小野さんはもって後二週間。
すぐに機材を借りて、再生した。

『もう録画できてます？
１５分したら、自動的に…あ、あ、はい
じゃ……はい、どうも…

（どうやら持ってきた看護士がいなくなったらしい）

芦品さん、こんにちは

このビデオを見てくださってるってことは、私はもう起きていないんですね
……いつか来るって思ってたけど、なんかヘンな感じです

あ…っと、今日はどんなお天気ですか？
こちらは朝からしとしと雨降り、でも今の私は、そこそこ調子が良いですよ

でも手が使えないのって、不便ですね
ひとりじゃなんにもできないんだもの

こちらの芦名さんは、さっき昼食を下げてくださいました
しょうが焼き、少ししか食べられなかったけど美味しかったです
介助、いつもありがとうございます

え、っと、その…本当は、直接お話した方がいいんだろうけど
やっぱりできなくて、ビデオに残しておくことにしました

（しばらく逡巡する小野さん）

…っ、はい、言いますね
実は私……前からあなたのこと、知ってたんです
最初にこの病院に来たとき、他の患者さんにぶつかって、カバンの中身を廊下にばら撒いてしまって
その時それを拾い集めてくれたのが、芦名さんでした
もう、覚えてませんよね？

すいませんって頭を下げる私に、ここは会計課も売店もロビーもあって、いつも混んでるからって、笑ってくれて
それだけのことなんですけど、私にはそれが、すごく嬉しかったんです

もう、長くないってわかっていました

他の病院で手立てはないって言われていたし、自分でもそんな感覚
があったから
自分で自分の寿命がわかってしまうなんて、本当に気味が悪いです
それを……冷静に受け止めてしまえる自分も

この病院が、コミュニケーション療法をとっていることは調べて知
ってました
芦品さんと出会う機会はもう無いと思ってたんですけど、偶然、あ
なたが『特設不在石化科』の看護士さんだって知って
その時思ったんです、最期のお話し相手は、芦品さんがいいな、って

昨日……ありがとうございました
きっとわかってらしたと思いますけど、背中だけでいいなんて言っ
たの、嘘です

本当は……芦品さんに、みんな見てもらいたかった

芦品さん、私に聞きましたよね
私が、幸せについてどう考えているか

私は……「生きたい」って思える何かを手に入れられることが、幸
せなんだと思います
生きてて良かったとか、生まれて来れてよかったとか……そんな風

に思えるものを、手に入れられること

私はそれができたら、いつ死んだってよかった
本当は早く死にたかった
自分が何で生まれてきたのか、何で生きてるのか、全然わからなかった

（ここで少し小野さんは笑う）

こういうのって、世間じゃきっと、甘えてるとか言われるんでしょうね
でも…誰にも非難なんてさせません
だって、他の誰も、私じゃないもの
私と同じような体験をした人も、私じゃないんだから、私の気持ちはわからない
わかってくれなんて、私も思ってないし

あ……ここだけの話、しますね

私……好きな人とキスしたの、昨日が初めてでした
すごい、嬉しかったです

だから…もう全部いいことにしちゃったんです
一番してみたかったことは、叶ったから

（涙ぐむ小野さん）

……芦品さん、ありがとうございました
あなたに会えて、よか……『

小野さんの最後の言葉を待たずに、ビデオはそこで、切れていた。

それから二日後、貴崎さんという男の人が来た。
ご本人曰く、小野さんの知り合いだとか。
がっしりとした体格に、男性的で意志の強そうな顔の、いかにも「飼い主」らしい人だった。
刺青のことを聞いてみようかと思ったけれど、やめた。
床ずれ防止のために横向きに寝かされた、小野さんの首の付け根。

ちょうど、あの刺青のあるところを、そっと撫でていたから。

髪を撫でて、頬を撫でて、手を握って。

怒ったような顔つきで出て行ったその人は、廊下の隅で声を殺して泣いていた。

その次の日には、母親を名乗る人が来た。
全ての説明を受けても顔色一つ変えなかった人はけれど、それからずっと、小野さんの傍についている。
毎日朝早くから病院に来て、時間の許すぎりぎりまで。

「嘘ばっかりつくんだから、小野さんたら」

面会時間の過ぎた、夜１０時。
お母様は、ついさっき帰ったところ。
小野さんの手を握りながら、僕は彼女に話しかける。

「悲しんでくれる人が誰もいないなんて
今日もお母様いらしてましたよ
ほらお花も、貴崎さんも毎日贈ってくださって」

綺麗でしょ、と、花瓶に活けた花束をかざしてみる。
相変わらず、小野さんは目を覚まさない。
見えやしないってわかってるんだけど、それでも、こうして話しかけないではいられなかった。
意識がなくても、どうにかして伝えたいと思うから。

貴崎さんのこと。
お母様のこと。
それから。

「…今日も、生きていてくれてありがとう
僕は、それだけで幸せです」

眠る小野さんの頬に、唇を押し付ける。
あんまりにも健やかな寝顔で、いつもどうしても思ってしまうのだ。
みんながひりひりしながら毎日過ごしている間に、いつかひょっこり起きてくるんじゃないかって。
滑らかな肌は日に日に石っぽくなっていっているけど、そんなの気にしない。
鼻を近づけて香るのは、有機的な病人臭さじゃなくて陽にあてられた砂の匂いだけど、それも気にしない。
気にしない。

嘘だ、そんなの。
気にしないでなんて、いられるもんか。
小野さんの生体反応はどんどん下がってる。
心拍も呼吸も、もう生きているのがやっとってくらいだ。
排泄なんてとっくにない。
触れる肌が毎日冷たくなってる。

駄目だって、小野さん。
まだあなたの知らないことが、いっぱいあるのに。
あなたが知らないといけないことが、沢山残ってるのに。

起きてよ、小野さん。
ほんのちょっとだけでもいいから、あなたに向けられているものを見てよ。
起きてよ小野さん。
ねえ。

「……っ、」

少しでも気持ちを緩めると、いつも一緒に涙腺まで緩む。

視界がぼやけるのと同じ早さで、胸が不安で塗りつぶされる。

「っ、あ、明日
そう、明日はね、またとってもいい天気になるんですって
暑くなりますよー、なんたって夏真っ盛りですからね」

左目から雫が零れたのに気付かなかったふりをして、ぼくはまた小野さんに笑った。

晴れているのに風が涼しくて、もしも小野さんが起きていたなら、きっと窓を開けたがるような、そんな日。
小野さんの酸素マスクが、外された。

さすがにお母様が動揺を見せた。
娘を殺す気なのかと詰られたが、この病気はここまでくると酸素を与えることが逆効果になるのだと話したら、やっと落ち着いてくれた。
その日に限って、貴崎さんが来ていた。
何も言わないうちに彼は状況を理解したらしく、青ざめた顔をして、小野さんのベッドの足元に立ち尽くしていた。

窓を開けると、すぐに気持ちのいい風が吹いてきて、小野さんの髪を揺らした。

「小野さーん、ほら風
気持ちいいでしょう？」

およそ有機的なものを何もかもなくし、石像のようになった小野さんが、ほんの少しだけ唇に笑みをつくる。
本当に幸せそうな、夢見るような笑みを。

「せっかちだなぁ、本当に」

逝ってしまおうとしていることを軽口で詰れば、小野さんの笑みは更に深くなる。
握った左手は、まだ温かい。
この笑みは病気の症状の一つだって分かっていても、こんな風に思わずにはいられない。

もしかしたら、彼女はもう、みんな知っているのかもしれない、って。

柔らかに刻まれた微笑を見つめ、彼女の体温を感じながらぼくは思った。

ずっと眠ってはいたけど、小野さんは自分の身の回りで起きていること全部に、気がついていたんじゃないか。
貴崎さんが来たことにも。
お母様がずっと傍にいたことにも。
僕のことも。

それで今だって、本当はみんな分かってて、それでもわざと起きないでいるんじゃないかって。

感傷でしかないけど、そうだったら良いと思った。
悲しい誤解をしたままなんかじゃなければいい。
小野さんがその手にちゃんと、欲しかったものを手にしていたことに気付いていたらいい。
そう思わないでは、いられなかった。

奇跡なんて、そうそう起きないってわかってる。
自分が思ってることが現実であるわけがないって、わかってる。
小野さんが今目を覚まして、ひりつく気持ちを必死に堪えているぼくらを見てくれることなんて、起こりえないってわかってる。
だからこそ、せめて身体を捨てていく旅に、彼女がささやかなお土産を持っていることを、願わないではいられなかった。

―芦品、さん

計器の表示を確かめながらぼくは、ぼくを呼ぶ軽やかに高い小野さんの声を、じっとかみ締めていた。
ぼやける視界も、手の甲に幾つも落ちる熱いものもそのままに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5296h/

カウント・ダウン

2010年10月8日11時57分発行